



静岡の進路と課題(一)

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



駿河湾上空から静岡市と富士山を望む(写真提供:静岡市)

東日本大震災からもう一年と二カ月が過ぎました。日本は大震災の痛ましい犠牲者への鎮魂の祈りと、破壊された生活からの再生への努力、原発の存続可否を巡る議論で終始した二年でしたが、その間に私はスイス、ドイツ、フィリピン、アメリカ、オランダへ夫々一週間ほど国際会議等で行く機会があり、この一年は色々な意味で世界中の人々が「人類の将来」という大きなテーマを深く考えた一年であったことを強く感じました。

世界で最も進んだ技術力を持つ日本で起こった大惨事は一番大きなショックで、多くの人々に深く「人類の将来」ということを考えさせましたが、その他にも多くのことが有ります。人類の総人口が七〇億人を超えたこと。(私が学生時代には三〇億でした。地球の再生しうる資源では七十億の人口は到

底養い切れません)。その半分が「都市生活者」になったこと。(日本は既に三分の二が「都市生活者」です)。正しいと信じられて来た資本主義の理念がここへ来て引き起こした様々な矛盾と世界的な「資源困い込み」の拡大。宗教間の憎悪の復活。大変な速さで進行している地球環境の劣化や温暖化など、これからの世界の進むべき方向を憂える声は、多少のニュアンスの差があっても、どの会議でも共通のものでした。

その中でドイツの原発からの撤退の決意、オランダの温暖化による海面上昇に対する国を挙げての取り組みは大変に印象的でした。なにしろオランダの国土の大半は海拔数メートルで(オランダ国内の最高峰は海拔三八メートルです)水面下

の土地も広大ですから(巨大な堤防と日夜を問わない排水で国土を守っています。美しい景色を作っている風車は数百年に亘って排水を続けている装置です。)温暖化による水面上昇は正に国家の存在を危うくする危機です。

この二つの国の考え方については、次の号でもう少しお話ししますが、翻って美しく穏やかな駿河湾に面した静岡市の、未来の為の安全対策、発展のシナリオ作りとその実現には、長期的な視野に立った多くの英知と努力が必要なことは当然です。

これは単に巨大地震への対策と云うよりは、世界の大国の中で初めての本格的な高齢化と人口の減少に直面している国として、正面から取り組みなければいけない課題ですので、暫くはこの視点から書いて行きたいと思えます。